

有川くんと霧島くん

Ant and grasshopper are my friends

Kyoji

イソップ寓話の中に「アリとキリギリス」というお話があります。内容は、信号機の青はじつは緑なのだ、というくらい周知のものなので、いちいち説明はしませんね。

こんにちは、私がこの物語の語り部の瀬見沢（せみさわ）です。私が所属する国立K大学は、一般に最高学府として認知されている大学ですが、じつは学生の質は必ずしも大学の名にふさわしいものではないという認識は、それほど世間に浸透していません。

はっきりいってうちの大学の学生は、働きバチよりも怠惰で、モンシロチョウのように気まぐれです。学生の本分は学業ですけど、虫カゴを嫌うトノサマバッタのように勉強から距離を置き、蛍光灯に惹きつけられるシャチホコガのように勉強以外の楽しげなことにすり寄っていきます。

認めたくないですけど、事実なのです。

しかし、学生の多様性はじつに幅広く、なかにはまじめに学問に挑戦していく勇者のような学生もいるのです。私の友達の有川くんがそうです。

有川くんは4回生で、工学部に籍を置き、毎日卒論の研究のためにデータを収集しようとパソコンの前にどすんと腰を据えてがんばっています。もくもくと仕事をする彼の姿はじつに魅力的で、がんばってる男の子がモテる由縁を感じます。

彼とは入学当初からの知り合いで、1回生のはじめから講義にまじめに出席し、英語の授業では積極的に手をあげ、演習課題のために琵琶湖まで自転車で出向いて水質はおせじにもきれいとはいえない湖にその身体を沈めることも辞さない好青年です。

彼はとてもまじめで、しかも容姿も破綻してるわけではないので、女の子としては見過ごせないエモノです。まじめだからあんまりスレてなさそうだし。そういうわけで、これまでいろんな女の子が彼に迂遠なアプローチを仕掛けてきたのですが、彼は誰にも見向きしませんでした。

なんでだろうな、と思い、私は友達として彼にきいてみたのです。すると、

「僕、社会に出て立派にひとりで生きていけるようになるまでは、なるべく女の子とのつき合いを避けたいんだ。恋に勉強につて中途半端になるのが嫌だから」

ああん、今時こんなこと真顔で、しかもよく見るとけっこうかっこいい顔で、恥ずかしげもなく言うのける男の子なんているかしら。でも、ここにいるのよね。

このセリフには、立場は友達の私もさすがにググッときちゃいました。

でもでも、彼の決意はすごく固そう。大理石みたいにつるんとしてて、それでいて硬質な感じ。あ、でも大理石ってあんまり固くないか。たとえ失敗。

とにかく、彼はそういうまじめを絵に描いたような、いやいや絵画では描ききれないほどに、まじめの原子でできてるといっても過言ではないほどに、かっこいいのです。

続いて私の文学部の友達も紹介しちゃいましょう。

彼は霧島くんといって、文学部でニーチェについて研究してるとかしてないとか。ニーチェっ

て街の名前？ くらいにおつむの弱い私ですが、彼は私の質問に笑顔満開で、

「フルーチェの親戚だよ」

と、答えてくれました。

そういう人なのです。

もう少し具体的に彼の特徴をお話しましょう。彼は先に述べたうちの学生の特徴を残さず発揮し、怠惰で気まぐれでその上ふまじめなのです。講義には出ない。演習課題のレポートも書かない。毎日遊び呆けていて、夜の街に繰り出してはお酒を飲んでいきます。似たような友人とともにギターサークルを立ち上げて、いつも部室でだべっているのです。ところでギターサークルなのに、なぜか彼はバイオリンを弾いているのです。なんでギターじゃなくてバイオリンなの？

ときくと、

「え？ バイオリンってギターじゃないの？」

と答えてくれるのです。それもかわいらしい笑顔満開で。

そう、彼ったら、容姿がいいのです。

それもかなり。

大学で人気投票があったら、って、そんなの絶対に実現しませんけど、彼ぜえったい一番だわ。

そうに決まってる。ていうか私が決めた。

おお、自分を見失ってしまいました。そう、友達という立場の私がこんなにも妄想してしまうくらい、彼はカッコいいのです。

当然の帰結として、モテます。私じゃなくて、彼がね。

「男は外見じゃない」っていうけど、そんなのある程度の男の話ですよ。もう頭3つくらい突出しちゃった人間は、それだけでいいのです。存在を認められるのです。それくらい、鋭くて攻撃力のある武器なの、容姿がいいって。

彼は、自分がかっこいいこと、モテることを十分に自覚してて、それをありのままに受け入れる人なのです。ゆえに、経験豊富。女の子としては警戒対象ですが、一方でこの最高峰のパッケージを持つ彼にもてあそばれたいって、いやらしい願望もあるのね。

かくいう私も、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ、あそばれちゃったことがあります。私はずいぶん飲んでたからよく覚えてないのですが、どこまで関係を持ったかは明確で、大きな声では言えないけど心の中に特別設置した宝箱にいい思い出として仕舞いこんでいます。

かたちとしては、うーん、私が襲われたことになるのかな？ でも私はもう立派な大人なのです。嫌だったら嫌だって言うし、酔ってて頭が空回りしてたけど、そういう状態になっちゃったのは彼の責任ってわけじゃないし。それに、べつに後悔してないし。

以降も友達づき合いは続いていて、なんの問題もありません。たぶん、彼には私みたいな友達？ がたくさんいるのでしょう。健康的で正直者でたいへんよろしい、と私は評価します。

さあて、そんなふたりの私の友達は、じつはすごい仲良しなのです。きっかけは私を介してですが、どこに通じるものがあるのでしょうか、もう翌日には「俺たち親友じゃん？」みたいなノリになっていたのです。男の子って不思議。それともこれは特殊なケース？

3人で遊ぶこともよくあります。有川くんは、私が誘っても来てくれませんが、霧島くんの誘いには首を縦に振ることに迷いなど一切ないようで、霧島くんといれば、私も有川くんとも遊べるのです。ん、なんか、ちょっと不満感。

でも一時期は有川くん、霧島くんが誘ってもイエスって言わなくなっちゃった。たぶん卒論と就職活動で多忙を極めているのでしょう。まじめな有川くんのことだから、食事と睡眠以外はパソコンの前に座って、実験データを整理したり企業検索をしたりエントリーシートを書いているに違いないのです。私も見習わなくちゃ。

「有川はがんばり屋だなあ」

私が氣勢を上げて、霧島くんは我関せずといった感じの感想を述べて、相変わらずギターサークルでバイオリンを弾いています。はじめはまったくの初心者だったらしいのですが、今ではなんとなく聞いて心地よい音楽が演奏できるほどに上達しているのだからオドロキです。こういう文化的な特技もあるんだから、ずるいよなあ。

あれよあれよのうちに、私たちは等しく夏休みを迎えました。でも等しいのは残された時間だけで、現状はそれぞれまったく異なります。

有川くんはもう希望していた企業への内定をしっかりと決めていて、さて遊び呆けるかと思いきや、やっぱりパソコンの前に座りっぱなしです。絶対にサボらない。これでこそ有川くん。やっぱり好きかも。いやいや、私は友達。彼も友達。ん？　なんか日本語変かな？

霧島くんはまるで就職とか内定とか遠い世界の言葉のように感じているみたいで、就職課に行くこともないし、リクナビに登録することもないし、リクルートスーツなんか持ってすらいなと言っていました。これでこそ霧島くん。キャタピラーも裸足でよちよち逃げ出すほどにふまじめですが、容姿よければすべてよし。うーん、私って面食いなのかなあ？

あ、私の話もちょとしておきますね。一応内定はもらいました。全然興味ない仕事だけど。ていうか、自分が何に興味あるのかもよくわからないし。卒論だって、与えられたテーマを調べるだけだから中身なんてなーんもなし。調べる端から忘れて行って、いったい自分が何を研究してるのかもわからない。ダメダメだよ。でも霧島くんっていうキャラがいてくれるから、私も、これでもいいや、みたいな精神状態をキープできるのです。なんか責任転嫁っていうか小ずるい感じだけど、私が楽だからいいのです。はあ、最低。

夏休み、有川くんからは一切ケータイに返信がありませんでした。返事くらいしてくれてもねえ。それとも電源落ちちゃってるとか？　二か月も電源落ちっぱなしになってありえるか？　って思うけど、ありえるのです、彼の場合。

霧島くんとはちょくちょく飲みに行ったりクラブに遊びに行ったりしました。楽しいんですよ。彼といると。容姿だけじゃなくて、なんていうか、人を惹きつける能力にも長けているのです。しかも一回捕えたら離さないっていう強固な意志も持ち合わせて。魅力的なスパイダートラップって感じ。

霧島くんに、有川くんも呼んでよ、ってお願いしても、

「それがな、俺が誘っても無理だって言うんだよ。ほんと悪いけど、ってすっごい謝るんだけどな。そんなに言われたら俺も悪い気しちゃうさ、あんまりあいつの邪魔しないようにしてる

んだよ。ヒマになったら自分から連絡するって言ってたし」

だって。ええ？ 私には返信すらなかったんですけど？

んー、なんか、もしかしたら、有川くんと私って、友達じゃない？

霧島くんととられちゃったって分析もあるかも。

うーん、むかしはけっこういい感じだったのになあ。

結局、夏休みの間には有川くんには会えず終い。ちょっとさみしいかも。二か月ってやっぱり長いよね、友達同士といえど距離を置く期間としては。

この街の秋ってなんだかほかの街よりもさみしげで、みんなメランコリーな雰囲気を感じてます。でもそれは街中の話。大学の中では、4回生が卒論と就活と学祭準備でてんでこ舞い、あせりにあせって、まるで耳の近くをぶんぶん飛び回る羽虫みたいにあわただしいのです。

有川くんは卒論だけに集中してるでしょう。就活は終わってるし、学祭にはまったく興味を示さない人なのです。こういうのなんて言うんだらう、ストイック？ 違う？

霧島くんは学祭準備に忙しそう。毎年そうなのです。祭りごとが大好きなの。前日までは身を粉にする勢いで働いて、当日に力尽きるかと思いきや、準備のときの5倍のテンションで騒いで騒いで、背中から羽が生えてきてあたりに鱗粉をばたばたとまき散らさん勢いです。終わったら片づけなど「なんのこと？」とすっとぼけて、毎日街に繰り出して朝まで飲み明かすのです。こういうのなんて言うんだらう、ご都合主義？ なんか違うね。

そんな調子で秋はすぎ去り、そろそろ冬の訪れを肌で感じる時期になってきました。

十二月はイベントでいっぱいです。ざっと思いつくだけでも、ゼミの忘年会、バイト先の忘年会、恋人たちのクリスマスイブ、恋人を持たない人たちのクリスマスイブ、なんの楽しみもないクリスマス……ごめんなさい、ちょっとマイナス思考が混ざっちゃいました。

十二月になると、さすがの霧島くんの顔にも不安の表情が滲み出てきたみたい、ちょっと陰りがある感じです。それも絵になっててかっこいい。ああ、私ぜえったい面食いだ。

「はあ」

秋には忙しすぎて吐き出さなかったメランコリーなため息を、雰囲気を纏いながら押し出す霧島くん。フローラルな香りが漂います。

どうしたの？ って私がきくと、

「いやな、終わっちゃうなあって」

そうだね、もう大学生活も終わりだね。

「有川は街から出ていっちゃうし、お前だってどこぞの受付嬢だっけ？ 出ていくんだろ？」

うん。

「だろ、エンドオブエラってやつだよ」

エラの意味はわかりませんが、なんでしょう、彼が英語で言うとなんとなく詩的な雰囲気です。

「俺は就職しないからなあ」

え、じゃあどうするの？

そのとき、彼のケータイが鳴りました。

「お、わりい」

ああ、うん、わかった、なんて言葉を電話口にささやく霧島くん。

「今から有川来るってさ」

え、今の有川くんだったんだ。

「うん、そう」

なんとなく、霧島くんが元気なく見えたのはどうしてでしょう。いつもなら、「よっしゃ、有川来るぞ！」みたいなテンションなのですが。

ところで私たちは今、大学近くの喫茶店にいます。今時喫茶店に入る大学生なんているのかと言われたら、ここにいるのです、と答えるしかないでしょう。

コロコロと古風な鐘が店内に鳴り響き、有川くんがやってきました。

「よーう、久しぶり」

「ほんとだよ、お前、卒論で忙しすぎ」

「ごめんごめん」

私が久しぶり、と言うと、「ほんと、ごめんねえ」と微笑んでくれました。あら、なんか異常にうれしいのはなぜ？

私が意味不明に心地よくふわふわしていると、ふたりはぽろぽろと会話を始めました。

「卒論終わったのか？」

「まあ、とりあえずひと山は越えた感じかな」

「そうか、じゃあこれから遊べるな」

「いや、君はどうなの？」

「何が？」

「何がって、卒業だよ」

「論文？」

「も、そうだし、単位は？」

「うーん、どうだろ」

「ちょっと、大丈夫なの？」

「さあなあ」

「なんだよその態度。もうちょっと真剣になってもいいんじゃない？」

「たぶんなんとかなるんじゃない？」

「ほんとに？」

「いや確証みたいなもんはないけどな」

「はあ」

「まあまあ、そんな沈んだため息やめろよ」

「君のせいで出たんだよ」

「ええ、俺の？」

「頼むからさ、少しはまじめにやってよ。卒業できなかつたら留年だよ？ けっこう笑えないよ」

「大丈夫だって。根拠ないけど、俺ってさ、なんでもなんとなくいい方向に転がっていくもんなんだよ。そういう星の下に生まれたっていうか」

「僕は占星術の類は信じないよ」

なんとなく妙な空気です。有川くんは怒ってるってほどじゃないけど、霧島くんに対して不満があるみたい。当の霧島くんは、にへって笑いながら有川くんの言葉に答えてる。普段のふたりとはまったく違う印象があります。

有川くんが怒ってて、霧島くんが困ってるみたいだ。

「ほんと、頼むから卒業してよ。それだけが僕の心配ごとだよ」

「卒論の心配はいいのか？」

「もうそっちは大丈夫だからいいんだ」

「さすが、まじめのがんばり屋さんだな」

「少しは僕を見習うところがあってもいいんじゃない？」

「うーん」

「ほんと、まじめにやってよ」

「お前、そればっか」

「僕は心配なんだよ」

「ふうん」

さっきよりも空気が悪くなったかも。ぴんと張った緊張感みたいなものがあるって、何かの拍子にぷつんと切れてしまったら、一触即発っていうか、ケンカ開始みたいな。

とにかく異常事態です。有川さんと霧島さんがケンカするかもしれないなんて。

あいにく、私にはケンカを納めたりする能力はないのです。そう、なんの能力もない私。それでもふたりの友達でいられるのはどうしてでしょう。不思議ですね。

そのまましばらく沈黙が続き、それぞれがコーヒーをすする音だけが、私たちのテーブルの上で踊っていました。うっかり緊張の糸に手をかけて切ってしまうないように、身動きすらも最小限にすませて私はこちこちと固い動きと表情でした。

「とにかく、頼むよ」

「はあい」

有川さんは研究室に戻ると言って、店をあとにしました。去りゆくうしろ姿は、ちょっとだけ小さく見えました。なんだか子供を心配するあまり、常に前かがみになってしまうお父さんみたいな感じ。

「はあ」

また霧島さんがため息。コーヒーの香り。メランコリーとフローラルとコーヒーが入り混じってじっくり熟成、すごいダウンナーな感じです。

私がどうしたの？ ときくと、

「今の会話聞いてなかった？ どうしたのもないだろ」

いや、私も言ってから気づいたけどさ。

「有川に叱られるとさ、落ち込むんだよな」

なんだか、すごい殊勝な霧島くんです。ところであれって叱られてたの？

「有川は怒ってたよ。俺が怠け者だってな。自分がああいう性格だからかな、俺にも強要まではいかないけど、ある程度のラインは守ってほしいみたいな気持ちがあるみたいでさ」

なんか、ふたりとも相手のことなんでもわかっちゃう感じ。うらやましいなあ。

「お前が引き合わせてくれたんだろ。いや、この表現はちょっとキモいな。まあたしかに、あいつほど気の合う奴はいないなあ」

私はなんとなくさびしい気もするんだけど。

「なんで？ いつも一緒にいるじゃん」

そうだけど、三人一緒じゃなくて、ふたりとひとりみたいでさ。

「あ、そうだったの？ ごめん、全然気づかなかったよ」

うん、いいんだけどね。ふたりを見てるだけでも。

「でもさみしいんでしょ？」

たまにね。ちょっとだよ、ほんのちょっと。

「じゃあ今度三人で集まるときはさ、ふたりとひとりじゃなくて、ひとり×3で、みんなでくっついて楽しいことしようか」

……うーん、ちょっとだけ変なっていうか、いや、すごい変なっていうか、もうこんな妄想しちゃうなんて変態じゃない？ みたいなこと考えちゃったんだけど、これは言わないでおこうっと。でも霧島くんの言い方にも問題があると思います。

さて、もう卒論は終わったも同然、ちょっとだけ教授に嫌みごと言われたけど、そんなのなんとも思いません。もうすぐ社会に出ていくっていう不安と残り一カ月を切った大学生活を謳歌しきる使命感で心がいっぱいだからです。

有川さんと霧島さんは、年末に喫茶店で会って以来なんだか妙な雰囲気を持続させています。ちなみに私が描いていた妄想は実現しませんでした。そのほうが誰にとってもいいに決まっていますが、ちょっとだけ、ほんのひと握り、心の底でわだかまっていた私の欲望が少しだけ不満を漏らしたのは事実です。私は、このいやしい欲望をできるだけ心の片隅に押し込めてもう二度と出てこないようにするつもり。……できるかなあ？

このまま卒業を迎えて三人離れ離れになってしまうのは、私は嫌だしふたりも嫌に決まってる。ていうか私が決めた。そういうわけで、私は慣れない仲介役、第三者を進んで演じることにしたのです。

前と同じ喫茶店。偶然ですが、席まで同じ、配置も同じです。私がひとり、有川くんと霧島くんが向かいに並んで座っています。

さて、ここに集まったのはほかでもありません。私たちの関係を清算し、美しきグループ交際を復活させるためです。

「グループ交際？」

「清算って、終わりにするってこと？」

霧島くんと有川くんで、それぞれ引っかかる場所があったようです。

「べつに交際じゃあないけどなあ」

「それに何も終わりにすることないんじゃないかなあ。離れ離れになっても僕たち友達だし」

交際は不適切な表現でした、ごめんなさい。清算というのも間違っていました。修復と言いたかったのです。

「修復ね」

「なんか壊れてた？」

有川くんはとぼけてるのかな。それとも、ほんとに気づいてないのかな。いや、彼の頭脳レベルを考えれば、気づいてないなんてことはないはずだぞ。

「壊れてるってわけじゃないけど、前みたいな仲良し三人組じゃなくなったのは事実じゃね？」

「うん、そうかもね。僕が悪いのかな」

「いやいや、俺だよ。俺がお前に心配かけちまったからな」

「だよね」

「悪かったよ」

ん？ なんか仲直りの兆候だぞ。

「知ってる？ アリとキリギリスの話」

「へえ？」

霧島くんの声、裏返ってた。そりゃそうだよ、いきなりアリキリだもん。

「夏の間にはアリは一生懸命食料を集めて冬に備えてさ、キリギリスは冬のことなんか念頭にまったくなくて毎日歌って遊んでばかりいるんだ」

「知ってるよ。んで、冬になったらアリは食糧いっぱいのお巣穴でぬくぬくしてて、外で凍えて空腹のキリギリスに言うんだろ、『私は、夏にせっせと働いていた時、あなたに笑われたアリですよ。あなたは遊び呆けてなんの備えもしなかったから、こうなったのです』ってよ」

霧島くん、キリギリスのセリフのところだけすごい声出してた。なんか歌声みたいに私の耳に届いて、戯曲を聞いているみたい。

「ほんとはもっと辛辣な言葉を投げるんだけどね、アリは。でもそれじゃ残酷すぎるからって、アリはさっきのセリフを言って自分の食べ物をキリギリスにわけてあげるんだよ。いい話だよな」

「なるほど、だから、お前は夏にあんなアドバイスを俺にくれたのか」

「そうだよ。季節は違うけどね」

なんか話がずいぶんジャンプしました。アドバイス？ 私は知らない。関係ないみたいですが。傷ついてもいいでしょうか。

「ああ、お前には言ってなかったな。じつは夏休み前にさ、有川が勧めてくれたんだよ、大学院」

大学院？ つまり、就職じゃなくて進学ってこと？ 文学部なのにな？

「そう、文学部なのにな。しかも俺がな」

「君なら大丈夫だよ」

「お前のその自信はどっから来るんだ？」

「さあ、出所は不明だね。でも僕にはわかるよ、君は研究職に向いてるって」

ええ？ 霧島くんが研究職？ じゃあ大学院って逃げ道としてじゃなくて、勉学を進む道なんだ？

「有川はそのつもりらしいんだけど、ほんとに俺にそんなことできんのかなあ」

「大丈夫だって、僕が言うんだから間違いないよ」

こんな自信たっぷりの有川くん見たことないです。じつはいつも自信たっぷりなのかもしれませんが、態度には見せてくれないので。どうしちゃったのかしら。

「ほんとにかあ？ もうちょっと明確な根拠みたいなもんが提示されればなあ。視覚的に理解できるやつ」

「そんな装置はまだ開発されてないね。僕の脳内イメージをディスプレイにアウトプットできるデバイスが開発されれば可能かも。でもまだ時代はそこまで行ってないよ」

「残念だなあ」

なんの話してるんでしょうか。難しい概念とか横文字がたくさん出てきてよくわかりません。もっと地球環境に優しく、私の頭にも優しく。

「まあとにかく、俺は大学院へ進む。そこで一步踏み進んだ環境で、勉学が自分に向いてるかどうか、確かめてみるよ」

「うん、それがいいよ」

「普通逆だけだなあ」

「そうだね、工学部の大卒ってあんまりいないからね。文学部の院生も」

「俺ら、アウトローだな」

「だね」

向かいで微笑むふたりは、ちょっとあっち系に見えなくもありませんが、当人たちの実態を知っている私は、そんなおぞましい妄想はいたしません。とんでもないデスよ！ って感じ。

とにかく、私が何もしないうちに問題は解決した模様。しかも霧島くんの進路まで決定しちゃって、これで不安要素はもうまったくありませんね。

ん？

「ちょっと、どうしたの？」

「なんで泣いてるんだよ？」

あれ、私、泣いてる？

あ、ほんとだ。頬が濡れてる。

なんでかな？

「なんでか、僕たちが知りたいよ」

でも、私にもよくわからないんだけど。たぶん、不安が全部解消して安心したから流れ出た涙じゃないかな。それ以外、原因というか理由が思いつかないから。

「そんなことで普通泣くか？」

「それだけ、僕たちのことを気に病んでくれてたってことだね？ ごめんね、心配かけて」

うん、いいんだよ。私が勝手に心配してた——

勝手に？

なんだろう、目が熱い。涙がまた流れ出てきた。

どうして？

「ど、どうしたの？」

「おい、大丈夫か？」

ちょっと失礼して、トイレに行ってきます。

私は席を立って、トイレに飛び込みました。

鏡の前で、精神を統一します。まずこうしないと、頭の中ごちゃごちゃで、なんにも考えられないから。

とりあえず、涙を止めましょう。

ぐううううう、っと唸ってみます。ほら、止まった。

次は、頭の中のいらぬものをゴミ箱へ。いりそうなものだけ残します。

コーヒーのおいしさ、今はいらぬなあ。有川くんの心配そうな顔。今はいらぬけど、ゴミ箱にはとても捨てられない。とりあえず引き延ばして壁に貼っておこう。霧島くんの魅力すべて。いやいるよ。でも今はちょっと、関係ないかも。捨てないで、とりあえず隅っこに移動させて、と。

残ったものは、ああ、私の感情か。

ん？　なんかこれ、一番でっかいぞ。つまり占める面積が大きいってことね。

これなんだろう？

手にとってみると、むにむにしています。色は、灰色かな？　白寄りの。雨降ったあとの空みたい。

あ、でも触ったからわかつちゃった。色合いも納得って感じ？

これやっぱり、さみしさだ。

これが涙の原因っていうか理由だったんだ。

席に戻ると、ふたりの心配そうな顔が仲良く私の目前に並んでいました。

「どう？」

「気分は？」

ふたりとも、優しいです。さっき泣いちゃったのは、はじめはあれですよ、ふたりとひとりなのを強く感じたからで、次にどばってきちゃったのは、それを認めて受け入れてた自分が悲しくなったからなの。ふたりとひとは嫌だって言ってたのに、どうしたってふたりの間に入っていけないんだ私、って気づいちゃったから。

でも、私もちゃんとふたりの視界には入っているようで、とてもうれしいです。だって、こんなに心配してくれてるんだもんね。私がトイレに入ってからもう二時間くらい経つのに、ちゃんと待っていてくれてたんだもんね。ちょっとくらいは怒ってもいいんだよ。

「もう大丈夫みたいだな」

「じゃあ、ちょっとだけ怒らせてもらおうかな」

まず有川くんが、私の額を小突きました。次に霧島くんが、今度は私の額にデコピンをしました。そして、ふたりで片方ずつ、私のほっぺを掴んで前後に揺さぶりました。どれも痛くないですし、むしろくすぐったい感じで、私の心の中はぼかぼかと熱を帯びてきました。えへへ、なんかかわいがってもらってる。

そうなの？

ふたりとひとりじゃないのね？　私、ひとり孤立してないのね？

「そんなふうにしてたのは、君だけだよ」

「最初から言ってたろ。俺たちはひとり×3だってよ」

そうなのね、よかったよ、確認できて。

こういうときは、涙が出ない私です。そのかわり、すごい評判が悪い、塩をかけられて溶けたナメクジみたいな笑みを浮かべました。

そんな私の気持ち悪い顔を見ても、ふたりは笑い返してきてくれました。

有川くんも霧島くんも、ほんと、いい人。だいすき。

さて、その後の話をしようと思ったのですが、特に言うべきことはありません。私たちはそれぞれの道を歩み出し、喫茶店に集まる機会もなくなってしまいました。

だけど心はいつもつながってるのです、なんて精神論はもちろんありません。真の友達というのは、もっと単純で軽やかで、いつもつながってるような関係じゃなくて、ばらばらのパズルのピースみたいなものなのです。いつもは離れた場所で単独ですが、いざひとところに集まると、パチンパチンと重ねて全体のかたちを成すものなのです。

それが、本当の友情というもの。

私が大学生活で得た、一番の宝物です。

おわり

有川くんと霧島くん（現代版アリとキリギリス）

<http://p.booklog.jp/book/6367>

著者 : Kyoji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ireadforpleasure/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/6367>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/6367>